
世界で一番幸せな人生

夏のラジオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界で一番幸せな人生

【Nコード】

N2659D

【作者名】

夏のラジオ

【あらすじ】

私はなんて幸せ者だろう。世界で一番幸せな人生を送った。ありがとう。

私の目は全ての景色を映し出す権利を持った。病室の、窓の外を舞う桜が美しい。彼らの行く先はきつと私と同じ場所なのだろう。初めて漫画が動き出した、あの感動は忘れられない。あの瞬間、私は世界一高い場所で、世界一美しい風景を見ていた。

「お父さん、凄いよ。この絵動いてる」

テレビの前ではしゃぎながら、隣で茶を啜る父に言う。

父は笑った。

「ははは、幸一。これはな、少しだけ違った絵を、凄い速さで見せてるんだよ」

「どうゆうこと？ よくわかんないや」

「なんて説明すればいいかな……」

父の顔を見たのはその時が最後だった。正確には、私の記憶の中では、だが。

2

私の耳は全ての音を響かせる権利を持った。最愛の妻と二人の子供。彼らの声はまだ聞こえている。

母が語ったことがある。彼女と父は涙を流し、私の誕生を喜んだそうだ。そう、私は生まれ、生まれてきた。生きることの使命を与えられた。

「お前の名前だった？ ああ、幸一ってのは『一番幸せ』って意味なんだよ」

「一番幸せ？」

台所で鍋をかき混ぜながら母は頷く。

私の頭の中は疑問でいっぱいだ。

「でも……」

母に尋ねる。「うち、父さんいないし、貧乏だし……。それに昨日涼子ちゃんに『幸一くんなんて大嫌い』って言われたんだよ。これじゃあ一番幸せじゃないじゃないか」

「うっん」

彼女はクスツと笑って首を振った。「幸せだよ」

今では、その言葉の意味が私にも理解できる。そのことを彼女に伝えようとしても、もう彼女はどこにもいない。

思わず笑顔になってしまった。その時、母が作ってくれたカレーの味と匂いを思い出してしまったのだ。

どうやら私には味覚や嗅覚さえも与えられていたらしい。

それから、由美を見る。お前もよくカレーを作ってくれたな。それにしても……。

私が笑っているというのに、お前はなんて顔をしているんだ？

なあ、お前は俺と一緒に来て、幸せだったか？

憂鬱に降りしきる雨の日。

本当なら彼女に別れを告げるはずだった。

「ねえ、東京に行くなら私も連れてって」

同じ傘の下、彼女は涙目で私に訴えた。

「お前を連れていったらお前まで不幸になるだろ」

「それでもいい。それでもいいから」

そう言いながら私に抱きついた。

この時、彼女を突き放していたなら、我々の人生はどのような形になっていたのだろうか？

少なくとも私には想像がつかない。

初めてのキスの味は、嬉しさと不安とが入り混じった涙の味だった。

「父さん」

雄太が手を握ってくれた。

あんなに小さかった手が、今では私よりも大きくなってしまったのか。

握り返そうとする。

だが、力が出ない。

「ねえ、お父さん。返事して」

歩美の声だ。

お前たち、喧嘩ばかりしてたくせに、こんな時だけは気が合うんだな。

「ねえお父さん、お兄ちゃんがいじめるー！」

やれやれ、と私は溜息を吐いた。

「おい雄太！ お兄ちゃんなんだから妹をいじめちゃダメだぞ」

「だってー」

雄太が唇をとがらせる。「歩美の観るアニメ、つまないんだもん。俺は野球みたいのに」

「野球なんてイヤー」

歩美が大声でわめいた。

「こらこら」

二人を両手で制止する。「ここは正々堂々、ジャンケンで決めなさい。負けた方は大人しくあきらめろ」

彼ら兄妹は頷き、にらみ合った。そしてどちらからともなくお決まりの台詞を言う。

「最初はグー！ ジャンケンポイ！」

ジャンケンの結果は残念ながら覚えていない。しかし、負けた方はさぞ悔しかっただろう。大人しく、少女アニメか野球中継を観たか、はたまたテレビの前から離れてすねていたかもしれない。

「父さん……」

彼女が私の顔を覗きこんだ。病室の電灯が逆光となり、顔がよく

見えない。

いや……、逆光のせいだけじゃないのかもしれない。

私の頬に彼女の涙がこぼれた。暖かい涙だった。

そして雄太の手も。……いつの間にか由美も上から手を重ねていたようだった。

気づかなかった。

こうして、一つ一つ、全ての感覚は消え失せてしまつたのだろう。

最後に『心』が消えてしまう前に、私は思う。

『ありがとう』

私の痛みを、喜びを、悲しみを、感動を。

最後に最愛の家族に囲まれながら、この世を去る。

私はなんて幸せ者だろう。

世界で一番幸せな人生を送った。

ありがとう。

(後書き)

つまらない人生を送る全ての人に捧ぐ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2659d/>

世界で一番幸せな人生

2010年10月10日06時55分発行